

Phytogeography of Fukui Prefecture, Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00055623

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



植物地理・分類学会賞受賞記念講演（要旨）

渡辺定路：福井県における植物分布

はじめに

福井県の植物相は、本県が本格的な本草学者や全国的に有名な山岳を持たなかったもので、昭和の初めまでは不明確であった。

本県の植物相は昭和8年（1933）の“福井県生物目録”の発行によりその全貌が明らかになった。この生物目録はその序文に当時の知事、大達茂雄氏が「畏クモ聖上陛下ニハ今秋福井県ヲ中心トシテ行ハレル陸軍特別大演習御統監ノ為親シク龍駕ヲ本県ニ進メサセ給フ之レ洵ニ千載一遇ノ盛事ニシテ県民ノ斎シク感激ニ堪ヘサルトコロナリ此ノ時ニ方リ県下小中学校児童生徒ノ総動員ニヨリ陛下ノ御趣味ト御研究トニ関係深キ生物ヲ採集シ之ヲ天覧ニ供シ奉リ以テ奉迎ノ至情ヲ披瀝スル一方法トセリ…」と記されている。このようにして県下初めての此の生物目録は10月下旬に昭和天皇が陸軍大演習のため行幸せられるにあたり福井県生物界の一般を天覧に供するために作成された。実際、この業務に従事した者は尋常小学校第4学年以上、中学校3学年以下の児童生徒職員68,588名で、県下を挙げての大事業であり、集められた標本点数は総計169,05点と記録されている。

その内、植物は79,938点で、この同定には主として、当時、京都大学理学部植物学教室に在籍して居られた田代善太郎先生が献身的に従事された他、同教室の小泉源一・北村四郎・大井次三郎・田川基二の諸先生が応援して居られる。福井県の植物の責任者は旧制福井中学校の堀芳孝先生であった。田代善太郎先生の遺稿を一書にした“田代善太郎日記”の昭和8年の部を見ると、5月8日に福井県植物調査の大綱を決定し、5月11日から10月迄の半年間に県下一門の理科教師に植物分類研究を指導・調査しておられる。特に6月27日から7月12日にかけて小泉源一・田代善太郎・堀芳孝の先生方は現在の岐阜県白鳥町石徹白に入り現地の教師とともに大日嶽、和田山に、続いて大野市三ノ峰に登りシコタンソウ、ミヤマアケボノソウ、ミヤマムラサキ等を採集し、大野盆地を経て福井市鮎川にモクゲンジを見に行き、敦賀市では池ノ河内の湿原や敦賀半島の立石を視察された。その後、堀芳孝先生を中心に福井県の植物相が更にくわしく調査された。また、嶺南地方の植物相調査には三方町の今井長太郎氏が尽力されている。

福井県の自然概要について

福井県（旧越前国・若狭国）は本州の日本海側のほぼ中央に位置し、本州が西からしだいに北東へ折れるところに位置する。敦賀湾～伊勢湾を結ぶ正宗ラインはこの曲折にかかわる重要な地質構造であるが、県下では柳ヶ瀬断層（北陸トンネルのある木ノ芽峠山地の西側に限る）であり、これを境にして福井県の自然は嶺北と嶺南に大きく二分される。

嶺北地方はほぼ旧越前国で、北東部は白山火山群の諸火山からなる加越山地によって石川県および岐阜県に接し、また南部は主として高原性山地である越美山地によって岐阜県および滋賀県と境されている。この山地の間を九頭竜川水系が北東から北へ流れている。

嶺南地方は旧若狭国と旧越前国に位置する現在の敦賀市を含み、若狭湾を縁どる細長く狭い土地で、背後は京都府・滋賀県境の山地（900m以下）が迫り、大きい河川や平野はない。

気候においても嶺北と嶺南の対比は明らかで、嶺北の降水量は12月・1月にもっとも多い日本海型気候の北陸型であるのに対し、嶺南は降水量が9月に一番多い日本海型気候の山陰型に近い。もっとも、この変化は漸減的で、西に進むほど山陰型が顕著となり、敦賀は降水量配分では北陸型であるが、降雪量の少ない点では山陰型である。

気候の地域的差異は地形の複雑な嶺北に著しく、特に冬季に目立つ。中でも、温暖でほとんど降雪を見ない越前海岸と、寒冷で積雪量の多い奥越山地の対比は著しい。また、岐阜県境に近い和泉村の上穴馬地区の降水量は7～9月がもっとも多い太平洋型を示すことから、同地域は太平洋型気候への移行地帯であるといえる。

海岸は対馬暖流の影響で暖かく、年平均気温は15℃以上である。また、13℃の等温線は平地と山岳地を区分している。

福井県の植生と分布

福井県における森林植生は、沿岸部における照葉樹林と山岳地の夏緑広葉樹林によって代表される。

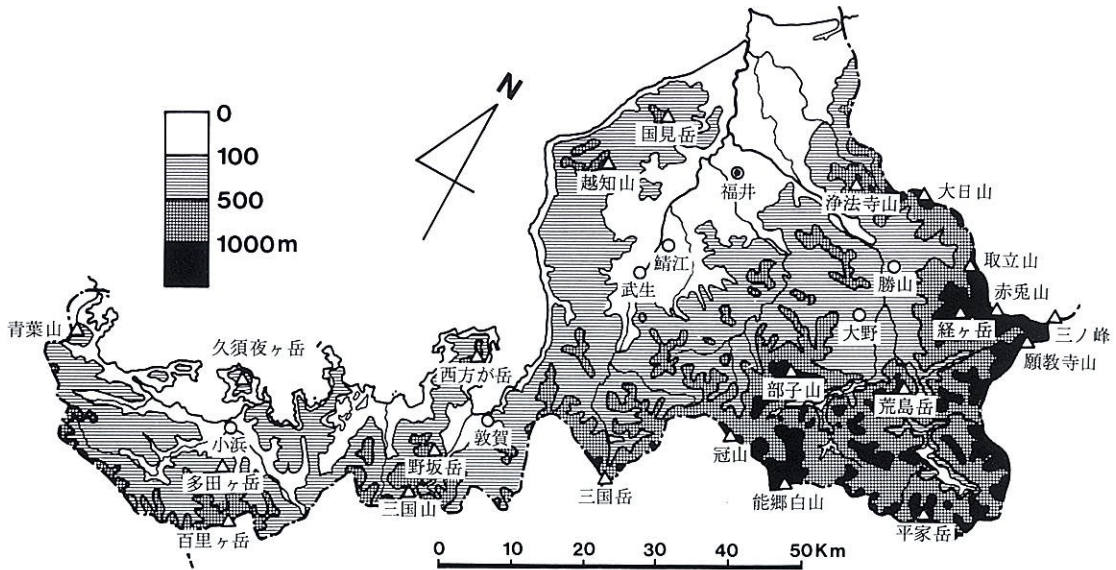


Fig. 1. 福井県の地形

照葉樹林の代表的な林はタブ林とスダジイ林である。タブ林は島嶼および、沿岸部の標高50m までに分布し、スダジイ林は沿岸部の乾燥地やタブノキ林の上部標高200m 付近まで分布している。照葉樹林の自生は一部の社叢林や島嶼に限られ大部分は植林やアカマツ林になっている。

この地域にはウラジロガシ、シラカシ、スダジイ、タブノキ、シロダモ、ヤブニッケイ等がよく見られる。また、これらと混生する木本にはコバンノキ、シキミ、カラタチバナ、ヒサカキ、ヤマザクラ、イタビカズラ、ネズミモチ、ツゲなど、草本類にはオモト、シモバシラ、フクイカサスゲ、コモチシダ、ハカタシダ、タニイヌワラビ、サキモリイヌワラビ、オニカナワラビ、セイトカシケシダ等が見られる。

嶺南地方の山地にはこれ以外に、木本類ではカゴノキ、ツクバネガシ、アラカシ、ヤマモモ、カナメモチ、ケサンカクヅル、ナタオレノキ、ホウライカズラ、キジョラン、アリドオシ、ホソバニセジュズネノキ、コショウノキ、タマミズキ、リンボク、シャシャンボ、オオバヤドリギなど、草本類にはオオハンゲ、キミズ、サンショウソウ、オオバチドメ、カンサイタンポポ、ヤマザトタンポポ、バンジガンクビソウなど、シダ類にはヒメムカゴシダ、シマシロヤマシダ、ヌカイタチシダモドキ、クリハラン、オクタマシダ、ナチシダ、キヨシミコケシノブなどの暖地性植物やハイタムラソウ、モミジチャルメルソウ、サンインシロカネソウ、ユキミバナ、サンインクワガタなども見られる。

嶺北地方の山地ではミノコバイモ、ナニワズ、エチゼンダイモンジソウ、マルバクサイチゴ、シロミノヘビイチゴなどが見られる。

海岸にはトベラ、ハマウド、ハマゴウ、ワカサハマギク、ハマヒルガオ、コウボウシバ、ハマナス、ウンラン、スナビキソウ、オカヒジキなどが見られる。嶺南地方の海岸ではこれら以外に、ヒトモトススキ、ヒメユズリハ、ボタンボウフウ、ムサシアブミ、ビワ、イヌマキなどの暖地性植物が、嶺北地方の海岸ではシロヨモギ、エチゴトラノオ、クロツバラなど寒地性植物が見られる。

夏緑広葉樹林の代表的な林はブナ林で、それより上部山頂に向かってダケカンバ林、オオシラビソ林、ハイマツ林、高山草原に移行している。しかし、福井県の最高峰三ノ峰(2120m)は白山に比べ標高がかなり低いためオオシラビソ林・ハイマツ林・高山草原との区別は明瞭でない。

ブナ林は標高600m 付近から1400~1450m までの間に分布し、林間にはシナノキ、ムラサキヤシオ、オオイタヤメイゲツ、ヒナウチワカエデ、アサノハカエデ、フサザクラ、ユクノキ、エゾヤマザクラ、ホザキツリガネツツジ、サワグルミ、トチノキ、ナンゴクミネカエデなどの木本や、ウスゲタマブキ、タイミンガサ、ギョウジャニンニク、ハクサンカメバヒキオコシ、サンカヨウ、ハルナユキザサ、シノブカグマ、ヤマソデツ、シラネワラビ、ミヤマベニシダなどの草本が見られる。



Fig. 2. 関東以西に分布する植物で福井県を北限または北東限とする植物

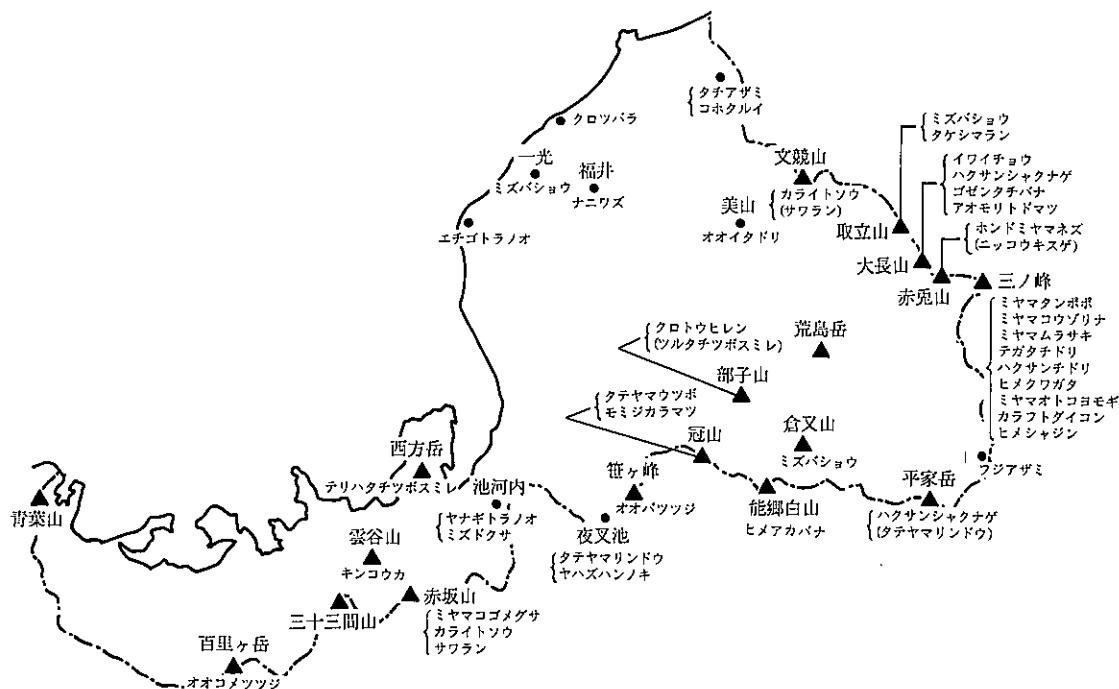


Fig. 3. 温帯性あるいは亜寒帯性植物で福井県を南限または南西限とする植物

三ノ峰ではブナ林の上部にダケカンバ林が発達しているが、オオシラビソ林は1900mの二ノ峰への稜線上と三ノ峰の頂上近くの緩斜面に僅かにあるのみで、その他では落葉低木林に移行している。これらの林間や林床には、ヤハズハンノキ、ミヤマハンノキ、ハリブキ、オガラバナ、ナンゴクミネカエデ、ミネカエデ、コヨウラクツツジ、キヌガサソウ、ヤマトユキザサ、タケシマラン、オオバタケシマラン、クルマバツクバネ、カニコウモリ、コウモリソウなどが見られる。

高木限界以上のところには、タカネスイバ、ムカゴトラノオ、センジュガンピ、ハクサンイチゲ、シナノキンバイ、ミヤマハタザオ、イワベンケイ、ミヤマダイコンソウ、チングルマ、ハクサンタイゲキ、ハクサンコザクラ、ガンコウラン、ヒメアカバナ、アオノツガザクラ、ヒメクワガタ、ヨツバシオガマ、エゾシオガマ、リンネソウ、タテヤマアザミ、イワギク、ミヤマオトコヨモギ、タテヤマアザミ、ホテイアツモリ、ニョホウチドリ、ハクサンチドリ、テガタチドリなど多くの北方系の植物が見られる。

また、岐阜県境の油坂峠付近をはじめ1000m以下の越美山地の鞍部には、加越山地などに産しない植物…コウヤマキ、イヌブナ、シラカンバ、ハルニレ、ヤマグルマ、ツルシロカネソウ、コセリバオウレン、ボタンネコノメ、コガネネコノメソウ、シロモジ、ウスゲクロモジ、マルバノキ、マンサク、ウラジロマンサク、オオバマンサク、ミヤマチョウジザクラ、ハスノハイチゴ、オオツルウメモドキ、トウゴクミツバツツジ、パイカツツジ、シロヤシオ、コアブラツツジ、サツキ、サラサドウダン、オトコヨウゾメ、カンボク、ヒダアザミ、イナベアザミ、ヒメアザミ、マルバサンキライなどが見られる。これらの多くは太平洋側要素の植物で、美濃地方から山越えに侵入したものである。

以上のような自然環境や分布状態から、福井県の植物相には次のような特徴が見られる。

1. 寒暖両系の植物が多く共存し、多くの植物が福井県で限止している
2. 日本海要素が豊富に自生している
3. 外帯系要素が県境付近に自生している

参考文献

- 田代善太郎. 1933. 福井県の植物分布. 植物分類・地理 Vol. II No. 4.
福井県. 1933. 福井県生物目録. 植物之部.
田代善太郎. 1944. 日本本土に於ける暖地性植物の分布考察. 植物分類・地理 Vol. X III.
寒蟬義一. 1954. 白山植物相と越前山地植物相との関係. 福井県博物同好会報 I.
寒蟬義一. 1960. 越前山岳地帯の植物分布. 福井県立藤島高等学校研究集録 II.
寒蟬義一, 渡辺定路. 1966. 福井県の植物分布. 福井県の生物. 日本生物教育会第21回全国大会(福井大会). 記念. 福井県教育研究会理科部会.
渡辺定路. 1989. 福井県植物誌.

(〒910 福井市松本町4-3-25)